

不登校のとりえ方

一人一人異なっていて、様々な様態を呈する不登校児に対して、どのように支援していいかわからない、という声を耳にすることが多い。他方、不登校を一くくりにとらえてしまう傾向もある。そのために、どのような不登校児にも、画一的・形式的な対応しかできずに、支援に行き詰まるケースも少なくないと思われる。このようなことが起こるのは、不登校のとりえ方があいまいであるからではないか。

不登校に適切に対応するためには、不登校のとりえ方を確かなものにしていかなければならない。この観点に立って、再度不登校を見つめ直し、そこから対応策・支援プログラムを構築していくことが必要と思われる。

1 不登校問題対応の基本的な視点

平成4年3月に出された「学校不適応対策調査研究協力者会議」の報告「登校拒否(不登校)問題について」で示されているとおり、不登校は特定の子どもに特有な問題があることによって起こるという観点でとらえるのではなく、「どの子にも起こりうる」もの、という視点でとらえる必要がある。このことは、平成15年3月に出された「不登校問題に関する調査研究協力者会議」の「今後の不登校への対応の在り方について(まとめ)」の中でも、不登校の背景として、「個人の生き方や関心の私事化、社会における学びの場としての学校の位置づけの変化、学校に対する保護者・子ども自身の変化など」社会全体の変化の影響が存在していることを指摘し、「どの子にも起こりうる」という考え方を繰り返している。「不登校は学校や家庭、さらには社会全体にもかかわる問題なので、現在何の問題もなく登校している子どもも、様々な要因が作用して不登校になる可能性がある。」という課題意識をもって不登校問題に取り組んだり、日常の教育活動にあたったりすることが、不登校の予防には必要になる。

2 不登校の発現の視点

不登校は、子どもの環境的な条件と内面的な条件とのかかわりの中から生じてくるものと考えられている。子どもたちが、学校教育や家庭生活や教育体制、社会のシステムの中で日頃から感じている「潜在的ストレス」などを、環境的な条件として挙げることができる。

内面的な条件としては、性格、感受性、ストレス耐性、コーピング・スキル(ストレスを処理する技能)などが挙げられる。現代の子どもたちは誰もがストレスの多い生活を強いられている。環境的な条件に、内面的な条件が加わって、不登校の前段階(準備状態)に至る子どもが発現すると考えることができる。この段階で、不登校の前兆・サインを発することが多いとされる。さらに、この状態に学校や家庭などで心の負担となる「直接的なストレス(誘因・きっかけ)」が加わった時、悩み・不安・緊張等の心理ストレスが強まって、子どもの行動や生活に乱れが生じてくることがある。この心理ストレス反応の一つとして発現するものが「神経症的な不登校」と考える。直接的なストレスをもたらすストレスの主なものとしては、対人関係(トラブル、いじめ、体罰など)や学業面での挫折、傷つき、環境の変化(転校、クラス替え、進学)などが挙げられる。また、直接的なストレスや心理ストレス反応の影響がほとんどなく、他の環境的な条件(交友関係など)と内面的な条件(性格傾向など)に左右される怠学傾向の不登校も考えられる。この怠学傾向の不登校としては、断続的に欠席を繰り返す「無気力・怠学型不登校」と逸脱行為を伴った「非行・怠学型不登校」がある。(図10)

不登校の原因を、不登校児や家庭は学校に、学校は不登校児や家庭に押しつけ合うようなことがおこりがちであるが、お互いの関係を悪化させ、感情にしこりを残すだけである。不登校問題は、子どもと、家庭と、学校、社会のいずれもが抱えている問題ととらえるべきである。

したがって、問題解決への資源（リソース）も、一元的でなく、多面的なものが求められており、そのための行動連携（協働）によるアプローチも重要になってくると思われる。

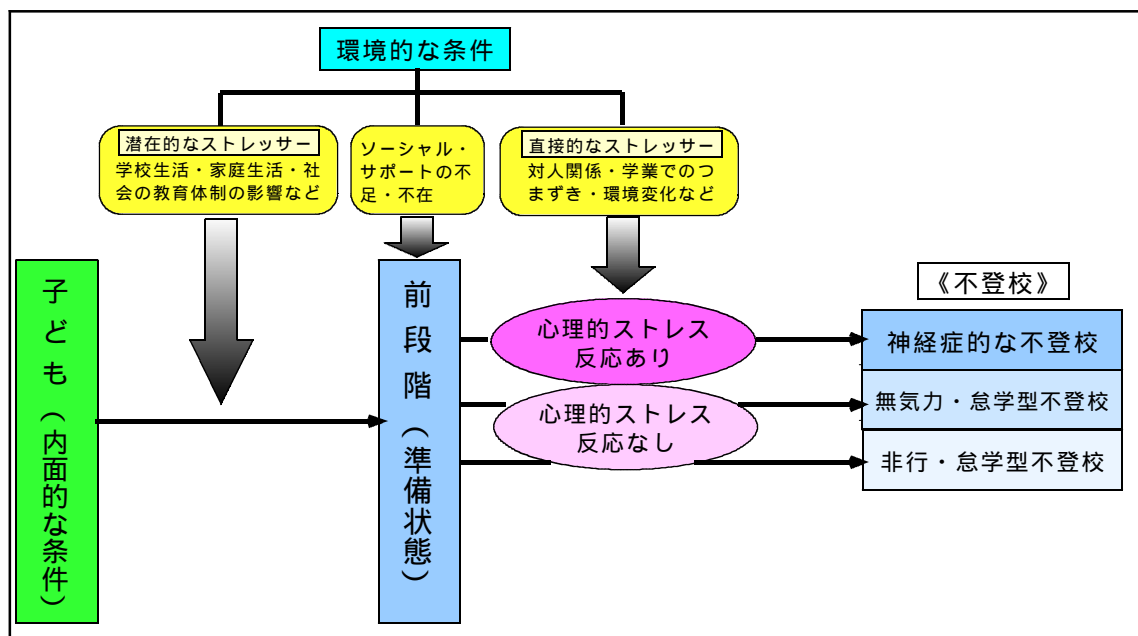


図10 不登校の発現(梅垣 1990作成, 小林 2005一部改訂)

3 不登校の状態像

不登校の状態像としては、『医師のための登校拒否119番』の中の梅垣弘氏のとらえ方が理解しやすい。

不登校のうち、心因性の「神経症的な不登校」の状態像の特徴は、一次的反応（中心的問題）と二次的反応（副次的問題）に分けられている。一次的反応（中心的問題）は、学校欠席を指す。二次的反応（副次的問題）は、「身体的症状・精神的症状」や「問題行動」等の行動化されたものなどが複合して形成される。「神経症的な不登校」とは、心因性の理由で欠席した子どもが、ストレス反応として身体的症状・精神的症状や外向的な問題行動・内向的な問題行動を無意識のうちにとる現象と説明している。「無気力・怠学型不登校」は、断続的な欠席を繰り返したり無気力な生活態度を示したりする。「非行・怠学型不登校」は、逸脱行為を伴う無断欠席が特徴で、仲間を求めて群がり、非行グループをつくったり反社会的な行動をしたりするととらえている。

不登校に対しては、この不登校の状態像を理解した上で、一人一人の不登校児の状態・状況を的確にとらえながら、それらに応じて、適切に対応していくことが必要と思われる。不登校の状態像のとらえ方を、以下のツリー図（図11）に示す。

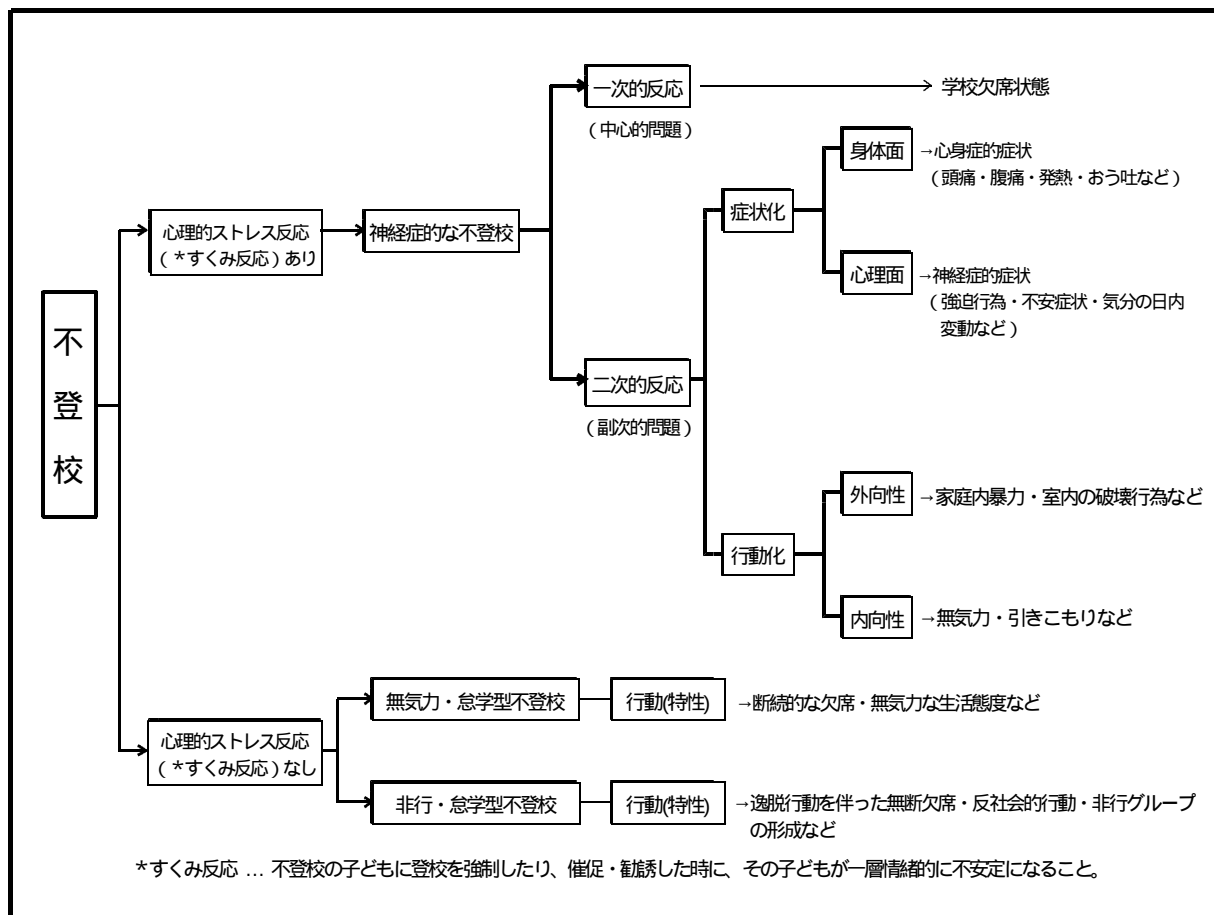


図11 不登校の状態像(梅垣 1990作成, 小林 2005一部改訂)

4 不登校と発達課題

不登校のとりえ方として、子どもの各発達段階における発達課題も重要になってくると考える。不登校をめぐる今日的な課題として、(地域)社会、学校、家庭の変化を背景とする、子どもたちの社会性獲得等の発達課題がクリアされていないことが指摘されることも多い。不登校は、「子どもの発達段階での一時的な心のつまずき」「子どもが大人への発達段階で、直面し克服しなければならないさまざまな発達課題につまずき、学校を欠席するという表現形を取りながらそのつまずきから立ち直るまでの不適応状態」(梅垣 1990)という考え方もできる。

このように、各発達段階における発達課題を考慮して支援することは、不登校に陥っている子どもに対しても、不登校のサインを示している前段階・準備状態にある子どもに対しても、対応策として重要なものの一つと考える。